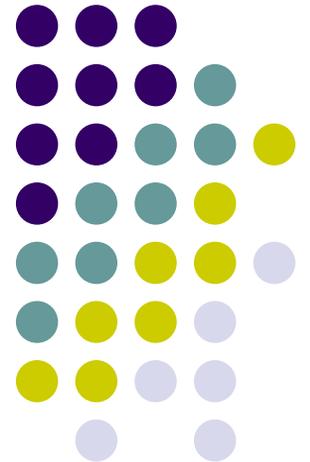
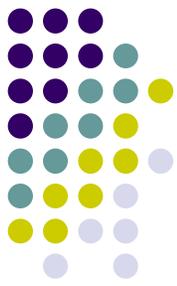


中国西南民族史

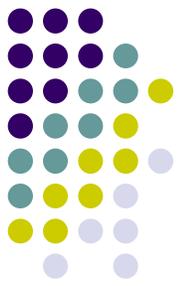
11. 大理国の中絶と高氏の専権 (11～12世紀)





高氏の台頭

- 高氏は大理国建国の功臣高方の子孫
「大理点蒼山蓮花峯下芒湧溪の人」(史料11.1)
「岳侯」を世襲する
- 1063 高智昇: 楊允賢の反乱を鎮圧して
徳侯に封じられ、さらに善闡侯(世襲)となる
- 1080 楊義貞、段廉義 を殺して自立、
善闡侯高智昇、子の清平官高昇泰に命じて「東
方爨焚の兵」を動員してこれを平定させる



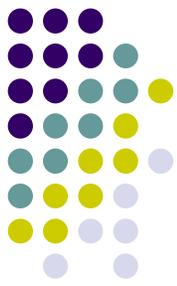
段氏から高氏への譲位

1080 高智昇、段寿輝 を擁立
高智昇は布燮、高昇泰は善闡侯となる

1081 段寿輝は在一年で段正明 に禅位

1093 段正明、高昇泰に国を譲る

「君たりて振わず、人心高氏に帰す。群臣善闡侯高智昇を立てて君となすことを請う」(史料11.1)



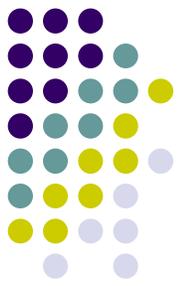
高昇泰の「大中国」

1094 高昇泰即位、国号を「大中国」とする

1096 高昇泰、病床に伏し、

子の高泰明に段氏に国を還すよう遺言

「**私の立国するは、段の弱きをもってなり。我死せば、必ず国をもってなお段氏に還せ。慎んで我に背くなかれ**」(史料11.1)



段氏の復興・高氏の実権掌握

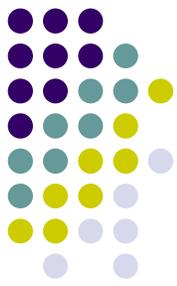
1096 高泰明、正明の弟正淳を即位させる

「後理国」

- 高泰明 相国、高泰運 柵王となる

「高氏これに相たりて、政令皆な其の門より出づ。国人称して『高国主』となす。段氏は虚位を擁するのみ」(史料11.1)

- 13世紀半ばの大理国滅亡まで、代々高氏が相国をつとめる(父子相伝とは限らず)



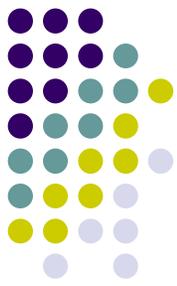
高氏の諸子分封

12c初 **楚雄城**を建設、**高泰明の甥高明亮**を封じる
(昆明～大理間の重要地点)

1103 **高泰運**、宋に入朝、経籍・薬書を求める
(中原側史料に記載なし) (史料12.2)

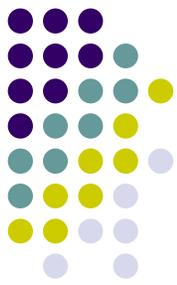
1108 段正嚴(和誉) 即位

1111 三十七蛮部の反乱、**高泰明**が鎮圧
泰明、四子**高明清**を**善闡鎮守**とする



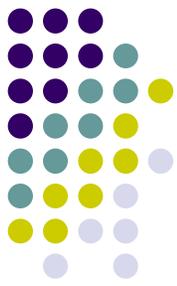
高氏の勢力拡大

- 高氏の勢力は善闡(昆明)・楚雄・姚州(姚安)を中心として、
東北部・南部を除く雲南各地におよぶ
- **高氏の中でも勢力争い**
段智興 のときの高壽昌(大理)・高貞明(鶴慶)・
高妙音(白崖)・成賢・成正(鄯闡)らの内紛など



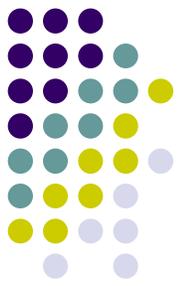
東アジア的現象？

- 同時代の東アジア世界：
「隋唐帝国の影響下で生まれた王朝国家が形骸化し、新興勢力(多くの場合武人勢力)が実権を掌握する」
- 日本(朝廷 vs 幕府)・高麗(王朝 vs 武人政権)
- 高氏も軍事面での活躍がめだつ



宋朝への入貢(1115~7)

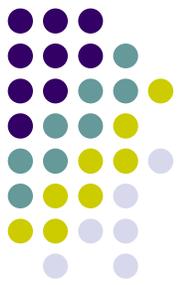
- 1115 広州観察使黄璘が中央に対し
大理国に入貢の意志があることを伝える
- 1116 奉使天駟爽彦賁李紫琮、副使坦綽李伯祥
らが宋朝に使いする
- 1117 2月 開封に至り、馬などを献上
宋朝は段和誉を「雲南節度使、金紫光祿大夫・
檢校司空・上柱國・大理王、加食邑一千戸、実
封五百戸」に封じる。 (史料11.3)



入貢の意義

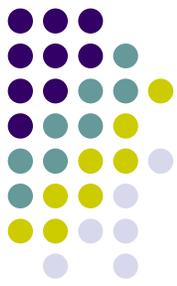
- 実際上の効果：？？？
北宋、遼と開戦し(1118)
金に滅ぼされる(1127) 朝貢関係は続かず
- 雲南側の「外交」姿勢の変化
大理国前期：中原王朝に臣礼をとらない点で
一貫していた

この時期になって変化した理由は何か？



「外交」姿勢変化の理由

- 実権が高氏に移ったことによる方針転換
(それにしては使節に高姓のものが含まれない)
- 専権を振るう高氏を牽制するために
段氏が宋朝からの権威づけを得ようとした
(だとすればなぜ高氏はそれを座視したのか)
- 「空白の一世紀」を経て交易を再開するにはそれなりの形式が必要？
(はじめから冊封云々は問題ではなかった?)

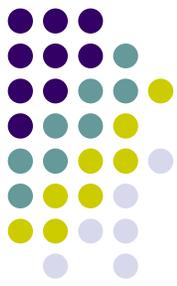


宋朝側に「虚構」の可能性

- 宋朝側のパイプ役黄璘： (史料11.3)
「昔年大理入貢、言者深指其妄、黄璘由是獲罪。」
(南宋初めの議論)

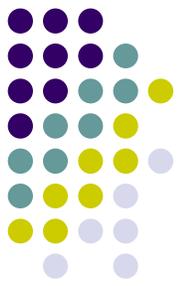
「言者深指其妄」は一般論(西南には手を出さない
by 太祖)のように見えるが「獲罪」の理由が不明

- 黄璘に何らかの作為？ (実際には交易を求めてきたものを、入貢と偽った可能性？)



南宋朝と後理国

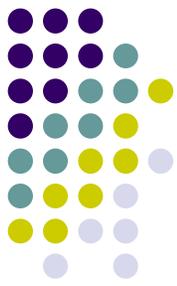
- 1130年代:南宋、広西に提挙買馬司を置き、**大理国**や**羅殿**、**自杞**(貴州南部の少数民族)から馬を購入(後者の馬も実際には雲南産)(史料11.4)
- 南宋側は朝貢使として取り扱うことを常に拒絶(1136 **パガン朝**の使者も同様に扱われる)
(史料11.3・11.6-7)



南宋朝と後理国

- この時期には「太宗が大渡河以南を放棄」という言説がすでに南宋士人のあいだに流布
- 大理国側もそれに不満を表した(= 入貢を要求した)形跡が見られない

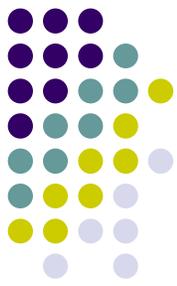
もっぱら馬綱(馬交易)によるつながりに終始



馬網の実態

『嶺外代答』経略司買馬条(史料11.7)
紹興27年(1157)の馬網:

- 定額分 : 三十綱 = 1500匹
- 添買(割増分): 三十一綱 = 1550匹?
合計3500匹(3050の誤り?)
- その他宮中に入れる馬など = 十綱以上
- 銀で値付け、支払いは「鹽錦綵繒」(塩や絹)



馬網にともなう「文化交流」

1173 大理国から李観音得・董六斤黒・張般若師ら23人が横山寨に馬の商談に訪れる

(史料11.3 / 11.8)

さまざまな書物(経書・仏教書・医学書など)や器物・薬物などを要求

- 「察実者不留声、観行者不識詞、知己之人幸逢相謁、言音未同、情慮相契。」
筆談で意を通じる